

英国における中国の映像(Ⅱ)

—フランス・イエズス会と18世紀英文学—

西 尾 朗

18世紀は英国文化史上に中国の名をもっとも鮮明に刻んだ時代である。14世紀 Mandeville がその著「旅行記」を通じて英国に中国の存在を紹介して以来およそ3世紀の間、英国はたえず中国へ接近の糸口をつかもうといろいろな企てを試みた。「北西航路」や「北東航路」の名で一般に知られているあの無謀な航路開拓の事業や東印度会社の設立などは、英国のかかる中国への執念の強さを如実に物語る顕著な例といえよう。だが、すでに拙稿で述べたように、¹⁾ 英国は17世紀末まで大陸諸国の激しい競争や妨害にはばまれ、東洋進出は思うようにはかどらず、したがって、中国との交易も大陸諸国とくらべると、非常に貧弱なものであった。かかる貿易面での接触の立ち遅れは当然、文化面での接触を遅らせる結果となった。事実、英国が中国文化に触れ、その影響を本格的に受けはじめたのは、東印会社が設立されて一世紀を経た18世紀になってからである。

大まかにいって、18世紀英国社会が受けた中国文化の影響を類別すると、二つの分野にわけることができると思う。その一つはフランスを仲介としてもたらされた中国の思想や文学、すなわち知的分野の影響と、他は陶器や漆器、それに壁紙、家具、庭園などのデザイン、といった美術面での影響である。本稿では、18世紀英国社会が受容した中国の知的文化の一面、とくに当時の英文学に及ぼしたフランス・イエズス会神父らの中国報告を中心に考察したいと思う。

〔Ⅰ〕

フランスは、周知の如く、中国とはカトリック系宣教師を媒介として密接な関係を保っていた。殊に17世紀後半、Louis 14世の中国布教の勅令に

よって中国へ渡った多数のイエズス会神父たちは両国の文化的関係を大巾に深めた点、東西文化交流の上に歴史的貢献をなしたといえよう。彼らは単に布教を通じて西洋の文化を伝えるだけでなく中国文化を本国に伝え、フランスにおける中国研究の端緒をひらく重要な役割を演じた。彼らの大部分は学僧であり、そのうちのある者は北京に滞在、時の皇帝、康熙に仕え、数学や自然科学を進講した。だが、他の者は中国各地に散在し、市井にあって伝道につとめたが、中国社会での生活経験を重ねるにつれ、彼らは次第に長い歴史と伝統に培われた中国文化の存在を知り、その深遠さ、偉大さに驚嘆した。彼らはこの驚きを著書を通じて、あるいは彼らの上司宛の書簡に託して本国に伝えているが、そのなかで中国文化の優れた特質として彼らが共通して指摘している点は、中国社会は道徳を基盤として成立し、その制度は非常に合理的であること、皇帝は専政君主でありながら民主的な仁政を国民に施していること、また、宗教は道徳を主体としたものであり、キリスト教のような超自然的要素をその中に含まない合理主義的な自然宗教であること、などである。

彼らの中国での見聞や研究を集めたものうち、とくに有名なものに Joachim Bouvet の著わした「康熙帝伝」(*Portrait historique de l'Empereur de la Chine présenté au Roy*) と、34巻にのぼる膨大な「耶蘇会士書簡集」(*Lettres édifiantes et curieuses écrites des Missions Étrangères par quelques Missionnaires de la compagnie de Jesus*) がある。前者は1697年に出版され、後者は1703年から1776年の長きに亘って出版された。いまこの二著の中から、一つ二つ例をとり、当時、中国に

派遣されたイエズス会神父らの中国観の一端をうかがうことにしよう。Bouvet は康熙帝の徳政について次のように書いている。

康熙帝は時々、諸省を巡幸されます。それは国民の生活状態と官吏の政治ぶりを視察するためであります。その時、皇帝は微賤な工人や農夫にも玉体に近づくことを許されて、言うに言われぬ親切な、温愛の籠った態度をとられるのが常であります。そして物優しく話しかけられるので相手はそれに魅せられます。いつも尋ねられる色々な質問のうちで、必ず上役人に満足しているかどうかを訊ねられます。もしもある上役人について苦情を申し上げれば、この役人は官職を失うことだけは請け合いです。官吏について有利な証言を申し上げれば、この証言ほどこの官吏の昇進に有利なものはないのです。²⁾

また、ある神父は中国とヨーロッパの差を日常生活面でとらえて次のように述べている。

ある日わたしは狭い切り立った路にぶつかりました。わずかの間に車馬のひどい交通渋滞が起きました。わたしはヨーロッパでしばしば行なわれるように、ひとびとは激昂し、中傷し合い、多分なぐり合うのではないかと考えていました。ところが驚いたことには、ひとびとは挨拶し合い、あたかもお互が旧知であり、互に好き合っているかのように穏やかに話し合い、そのあとで障碍から脱却し、通過できるよう協力し合ったのです。このような場合に遭遇した時、節度を守ることができないヨーロッパのわれわれキリスト教徒はこの手本を見たらびっくりして途方に暮れるでしょう。³⁾

以上の短かい引用からも容易に察知できるように、イエズス会神父たちの中国 reportage は、「康熙帝伝」にしる、「書簡集」にしる、かなり中国礼讃の記述が目立つ。これは「典札問題」にからんで北京に媚び、布教の特権をいつまでも占有したいという政治的配慮や、中国を必要以上に理想化して描くことにより、より多くの中国伝道の後継者を獲得しようとする彼らの思感によるものであろうが、いずれにせよ、彼らの書いた中国 reportage は往年の旅行記や見聞録とは異なり、筆者のひとりびとりが長期に亘って中国に滞在

し、中国文化の専門家であるということと、また彼らが聖職者であるという事実により、これらの reportage に寄せる世間の信憑性も高く、多大の人気を呼んだ。

とくに彼らの中国書簡に非常な興味と関心を寄せたのは、当時、勃興しつつあった bourgeoisie である。久しく王朝の専政と貴族や僧侶の圧力に苦しみ不平等な税制に血税を強いられていた彼らは、これら中国伝導の書簡の中に、自分らの理想とする社会が中国にあることを見つけ、徳治による中国皇帝の政治や、合理主義的な中国の社会制度に強い憧憬と関心を抱くようになった。彼らは自国の Louis 王家に中国の康熙帝のような仁愛政治を求め、人材登用の方法として科举制度のような方法を要求し、特権階級とその世襲性の廃止を叫ぶとともに、税制の改革、信仰、言論、思想の自由を主張した。もちろんかかる彼らの主張の根源はすべて直接イエズス会神父らの中国についての記事に起因したものではない。だが、その中に記された中国社会の制度や思想に関する記述は、当時、欧州を風靡しつつあった啓蒙主義の思想と合流し、遂に Louis 王朝を崩壊に追いやるフランス革命の間接的要因となったことは否定できない。

〔Ⅱ〕

さて、フランスでこのような大きな反響を呼び、ひいては社会変革の遠因ともなったイエズス会神父らの中国についての記述は、やがて、英国にも紹介されたが、英国の場合は、フランスとは異なり、それが思想的に大衆を動かす要素とはならず、むしろ当時の文学思潮の一要素として定着した。というのは当時、英国社会では民主主義の大黒柱ともいうべき「権利章典」(Bill of Rights) が既に制定されており、英国国民は王権の濫用や不当な課税から守られていたし、日常生活においても、権利と自由が保証されていたからである。かかる安定した英国の社会状態に、フランスの神父たちが、著述を通じて、いかに魅力的に中国社会の民主性を説いても、それに対して著るしい反応がなかったのは当然のことといえよう。

英国でこれらの中国 reportage が問題にされ、論議を呼んだのは、当時の文壇であった。英国文

学史の流れからいえば、18世紀は前世紀の古典文学がその地位を新しく萌芽しつつある浪漫主義文学にゆずろうとしていた時代であり、貴族文学に代わって庶民文学がようやくその抬頭をみた時代でもある。この新旧の文学思潮が混迷、交錯する過渡期にあつて、フランスの神父たちが描く中国は文壇に新しい素材を提供し、文人たちの注目をひいたことはいうまでもない。

とくに、フランスの中国 reportage のうち、当時の英国の作家に多大の影響を与えたものは、Louis Le Comte 師の「支那現状新誌」(*Nouveaux mémoires sur l'état présent de la Chine*, 1696) と Jean Baptiste Du Halde 師の「支那帝国全誌」(*Description géographique, historique, chronologique, politique, et physique de l'empire de la Chine et de la Tartarie chinoise*, 1735) である。前者は *Memoirs and Observations, Topographical, Physical, Mathematical, Mechanical, Civil and Ecclesiastical, made in a late Journey through the Empire of China* (1697) という題名で、後者は *The General History of China* (1736) の名で英語に翻訳、出版された。Le Comte 師の「支那現状新誌」は政治社会、地理、風俗、習慣、宗教など中国事情全般に亘って論述したもので、中国に関する包括的な知識を与える書として英国知識階級の間で歓迎された。Joseph Addison は1711年10月6日付の *The Spectator* 誌に親子の関係について一文を草しているが、その中で中国の親子間の事情を説明する際、この本を引用しているし、⁴⁾ またのちに述べる Oliver Goldsmith も *The Citizen of the World* (1762) の中で孔子の言葉を引用する際にこの本を使用している。⁵⁾ とくに Goldsmith の場合はこの「支那現状新誌」が出版されて半世紀以上経過している。この事実をみてもいかにこの書が貴重な価値を当時の英国文壇でもっていたかがわかることと思う。一方、Du Halde 師の「支那帝国全誌」は前項で述べた「耶蘇会士書簡集」のうち、中国に関係のある書簡のみを抜粋、これを項目別に分類し編集したものである。フランスでの評判のよさも手伝って、この本の人気は Le Comte の「支那現状誌」をはるかにしのぐも

のがあった。1736年、この本の英訳本が出版されるや、Edward Cave は早速、彼が主宰する *The Gentleman's Magazine* にその一部を連載し、また、のちに文壇の大御所となった Samuel Johnson も、1742年に3回に亘ってこの本に対する好意に満ちた書評を同じく *The Gentleman's Magazine* に発表した。⁶⁾ 一方、この本の売行きも大変よく、英訳初版本がでるや、ただちに数回増刷が行なわれたが、求めに応じきれず、1738年にはついに別の英訳本が上梓された程だった。⁷⁾

Du Halde の「支那帝国全誌」の英訳本がかかる人気をさらったのは、単にこの書が中国社会全般に亘って充実した資料を収録していたことによるだけではない。それにはもう一つ重要な理由があった。それは中国に渡ったフランスイエズス会の学僧 Joseph Henri Prémare の手によって仏訳された元曲「趙氏孤児」の英訳がその中に入っていたからである。英国はこの一篇の作品を通じてはじめて中国の古典劇に接したわけであるが、この古い中国の復讐劇はやがて2篇の中国を舞台にした劇の素材となった。その一つは William Hatchett の *The Chinese Orphan* (1741)、他は Arthur Murphy の *The Orphan of China* (1759) である。いまこの2篇の改作と原作の元曲「趙氏孤児」を比較する上で「趙氏孤児」の荒筋を簡単に記すと、『昔、中国に屠岸賈という悪將軍と趙盾という宰相がいた。屠岸賈は趙盾を憎むあまりにその一家を絶滅しようとする。趙盾はいろいろの人たちの助けで、たびたび難を逃れるが、遂に屠岸賈のわるだくみにおち入り、趙一族は滅亡されてしまう。ところがひとりの赤子が難をのがれた。これが趙氏孤児である。この孤児は程嬰という医師によって屠岸賈から隠れて育てられるが、遂に見つけられてしまう。とっさの知恵で程嬰は自分の子を趙氏の孤児と偽って身代りに差し出す。屠岸賈は程嬰の子とは知らずにその子を殺し、そして程嬰に趙氏孤児を差し出した報償として程嬰の子(実はこれが本当の趙氏孤児)を自分の養子にしたいと申出る。程嬰はこれを承諾。屠岸賈はこれが趙氏孤児とは知らずに育てる。20年後、成人した趙氏孤児は程嬰が差し出す絵巻物から自分の実の父母が屠岸賈に殺されたことを知り、屠岸賈を殺す』といったものである。

さて、この元曲を改作するに当って Hatchett は、まず「三一の法則」(Three Unities) とくに「時的一致」(Unity of Time) の法則をあまりにも重視したため、20年あまりに亘る原作の劇の進行を、その前半部で終結させてしまっている。したがって Hatchett 版の元曲「趙氏孤児」は孤児の誕生と孤児を隠すことに終始し、やがて悪将、屠岸賈に当る人物の悪行が露見し、彼は失脚するという筋に変わっている。この改作では、原作にみるような屠岸賈が趙氏孤児を程嬰の子と誤まって育てるという皮肉はなく、また、趙氏の孤児が成長して親のかたき、屠岸賈を殺すという原作の主要なテーマ、復讐の主題もこの作に十分生かされていない。一方、Arthur Murphy *The Orphan of China* も矢張り「趙氏孤児」を素材としたものであるが、Hatchett の場合とは違って、フランスの Voltaire が「支那帝国全誌」にあるこの話を換骨奪胎して作った *L'Orphelin de la Chine* (1755) をもとにして書かれたものである。いわば原作に2重の脚色を加えられた作品である。したがって当然、原作の元曲とは非常に異質なものとなっている。この Murphy の劇は Hatchett の作品とは反対に、原作「趙氏孤児」の後半部、すなわち成人後の孤児の活躍をもっぱら描き、しかも、その背景は単に趙・屠両家の争いというのではなく、孤児によって代表される中国と、帖木児によって代表される韃靼という2民族間の争いに拡大されて書かれている。したがって、原作の元曲にみられるような中国古典劇特有の素朴さはこの劇にはない。

しかし、Hatchett や Murphy による元曲「趙氏孤児」の紹介は、それがいかに原作とかけ離れたものであるにせよ、当時の文壇の眼を中国に向けさせる大きな役割を演じた。18世紀のはじめ *Arabian Nights* の英訳が刊行されるや、矢継ぎ早やに中近東の物語が紹介され、作家の間に東洋を題材とする作品、いわゆる東洋趣味 (Orientalism) にもとづく作品を書こうとする気運が急激に高まった。George Lyttelton の *Letters from a Persian in England to his friend at Ispahan* (1735) からはじまって Samuel Johnson の *Rasselas* (1759) を頂点とし William Beckford の *History of the Caliph Vathek*

(1782) にいたる一連の作品は、文壇におけるこの東洋趣味を具体的に表現した代表的作品といえよう。しかしこれらの作品が取り扱う素材の範囲は、主として中近東諸国にかぎられ、直接、中国がその材料に用いられることはなかったといつてよい。かかる当時の文壇の傾向の中にあつて、Hatchett や Murphy らの元曲の改作は、中国が中近東諸国にくらべて優るとも劣らない文学上の素材をもっていることを示唆すると共に、作家たちの想像力を刺戟し、彼らの東洋趣味を中近東から中国へ広げさせるきっかけを作った。この東洋趣味の拡大は、やがて、異国趣味の一部となり浪漫派の運動の重要な要素となしその中に定着する。かくして、後年、中国は多くの浪漫派の作家たちの間に新奇な題材を提供する異国趣味あふれる国として注目を浴びるようになった。忽必烈汗の名が詩聖 Samuel Taylor Coleridge (1772-1834) の想像力をゆさぶり、名詩“Kubla Khan”の詩作へ彼をかり立てたのは、その顕著な例の一つといふことができよう。

ところで、フランス・イエズス会宣教師らによって紹介された中国は、上述のように、浪漫派文学の一要素である異国趣味としてその中に定着したが、一方、風刺文学の上においても中国は大きな役割を演じた。その主たる演出者は Oliver Goldsmith (1730?-1774) である。彼は、当時、ロンドンで日刊紙 *Public Ledger* を経営していた John Newbery の求めに応じて、同紙に週二回“Chinese Letters”と題する記事を執筆、1760年1月24日から翌年8月4日まで全部で119篇を寄稿した。のち、彼はこれに4篇を加え、計123篇とし、序文をつけて1762年5月1日 *The Citizen of the World* という題名で上梓した。

周知のように、この本の趣向は、自称、孔子の弟子で河南省生れの Lien Chi Altangi と名乗る架空の中国人を設定し、彼が滞在するロンドンから、アムステルダムに住む商人や、ペルシャで奴隷となっている彼の息子 Hingpo、また、北京の Ceremonial Academy で学長をしている彼の友人、Fum Hoam、らと文通し、その書簡のやり取りを通じて、彼が異質の文明の中で経験したいろいろな事柄を伝える形式で書かれている。

さて、Goldsmith がこの *The Citizen of the*

World で試みたのは、当時の英国および大陸、いわゆる西洋社会の現状全般に対する風刺である。そこで取扱われている問題は「欧州の現状」(LV I) や、「英国の風土と国民性」(XC I)、「文壇の封建性」(LV II) といったものから「婦人の服装」(LXXX I) といった風俗時評まで含む広範囲なもので、これらの問題を著者は常に中国社会と対比の形で捉え、批判している。では、Goldsmith がこの作品の中で中国をどのように風刺に生かしているか、「婦人の服装」と題する一篇の中から一部分を引用して紹介してみたい。当時、英国では婦人の服装の裾を見れば、その婦人の社会的地位がわかるといわれた程、長い裾の婦人服が流行した時代である。彼はこの流行を揶揄して次のように述べている。

The ladies here [England] make no scruple to laugh at the smallness of a Chinese slipper, but I fancy our wives at China would have a more real cause of laughter, could they but see the immoderate length of an European train. Head of Confucius, to view a human being crippling herself with a great unwieldy tail for our diversion; backward she cannot go, forward she must move but slowly, and if ever she attempts to turn round, it must be in a circle not smaller than that described by the wheeling crocodile, when it would face an assailant. And yet to think that all this confers importance and majesty! to think that a lady acquires additional respect from fifteen yards of trailing taffety! I can't contain; ha, ha, ha; ...⁸⁾

上の一文でもわかるように、彼の社会批評には必ずユーモアが加味されて、辛辣な批判の調子を和らげ穏健なものにしている。*The citizen of the World* に記載されている123篇の記事のうち大半がこのような社会風刺となっているが、彼はこのような風刺のほか、冥想的、哲学的随想ともいべきいくつかの小品をこの本の中に入れている。夜のしじまに人生の悲哀を想う「夜想」(CXV II)、また、幸福とは過去や未来にあるのではなく、現在にあると説く「幸福論」(XLIV) など、流石に苦勞人だった著者だけに、どの作品を

みても醇醇とさすような落ち着いた筆致で書かれている。また、晩年における人生について、彼はこう書いている。

Life sues the young like a new acquaintance, the companion as yet unexhausted, is at once instructive and amusing, its company pleases, yet for all this it is but little regarded. To us who are declined in years life appears like an old friend; its jests have been anticipated in former conversation; it has no new story to make us smile, no new improvement with which to surprize, yet still we love it; destitute of every enjoyment still we love it, husband the waisting treasure with encreasing frugality, and feel all the poignancy of anguish in the fatal separation.⁹⁾

ところで、Goldsmith はこの本を書くに際して Montesquieu の *Lettres Persanes*(1721) とその改作 George Lyttelton の *Letters from a Persian in England to his Friend at Ispahan*(1735) および Marquis d'Argens の *Lettres Chinoises*(1739)、それに Horace Walpole の *A Letter from Xo Ho, a Chinese Philosopher at London, to his friend Lien Chi at Peking*(1757) などを参考にして、その手法をモデルにしたが、中国に関する資料は殆んどフランス・イエズス会神父らの中国記事、とりわけ、Le Comte 師の「支那現状新誌」と Du Halde 師の「支那帝国全誌」の記事から取っている。いま、この本全体に亘って両師の著書が如何に用いられているか、細かく比較検討するいとまはないが、さきに述べた風刺や随想と並んでこの本を構成するもう一つの genre、中国の教訓譚 (apologue) のうちから一つ選んで、その影響を考えたい。以下は Goldsmith が「中国婦人の物語」(XV III) と題して書いている物語の梗概である。

『昔、中国に Choang と Hansi という大変仲のよい夫婦がいた。ある日、夫の Choang が墓地でひとりの婦人が新らしく盛られた土を、扇子でおおいで見かけた。わけを聞くと、この盛られた土の中に埋葬されたのは実は自分の夫で、夫は死に際わに墓の土が乾くまでは再婚しないよ

うにとの遺言を残して死んだので、早く土が乾くようにと、扇子で、土をあおいでいるのだという。Choang はそれを聞いてあきれ果てるが、同時に夫婦の愛情というものが如何にはかないものであるかを知った。ところがある日のこと、Choang の昔の弟子が訪ねてきたので、Choang 夫婦はその弟子を大歓迎で迎えたが、大酒盛りをしている途中、Choang が卒中で倒れて死ぬ。あわてた Hansi は、とり敢えず Choang を棺に入れ埋葬の準備をするが、その間に、彼女は弟子と恋仲になり、結婚する約束をしてしまう。ところが結婚の当日、弟子が発作を起し、医者にみせると最近死んだ者の心臓を当てるとよいというので Hansi は大急ぎで Choang の棺のところへ行き、ふたをこじ開け彼の心臓を取ろうとすると、驚いたことに、死んだ筈の彼が棺の中で立ち上り、外へでようとする。彼は仮死状態のまま棺に入れられていたのである。かくして蘇生した Choang は召使から Hansi と弟子との事柄を一部始終聞かすが、その時、Hansi はすでに自分の行為を恥じて自殺している。Choang は自分のために折角、準備してくれた棺を無駄にしてはと思い、その棺に Hansi のなきがらを入れて使う一方、彼女と弟子とが進めていた結婚式の準備も有効に使おうと、かつて墓土を扇子で乾かしていた未亡人と結婚、静かな余生を送った』

Friedman は、この話は Du Halde 師の「支那帝国全誌」に“Tyen, or the Chinese Matron”の題で収録してある物語を Goldsmith が若干の改作をしたものである、といっている。彼によれば、Goldsmith が主として手を入れた箇所は結末の部分で、原作には Choang が未亡人と結婚する場面などはまったくなく、Hansi の自殺後、彼は再婚などを考えずに旅にで、遂に老子に会い、そこで余生を送る筋になっている。¹⁰⁾

以上、われわれはフランス・イエズス会の中国資料を基に Goldsmith が *The Citizen of World* を書き上げた一例をみてきたが、彼はこの本で意図したことは、中国を誇大に表現することにより、世間に熱狂的な中国熱を巻き起すことではなかった。それはむしろこの本の題名から察せられるように、また、彼自身 “I consider myself in the light of a Cosmopolite.”¹¹⁾ と述

べているように、当時のひとびとの心にマクロ的世界観、すなわち世界主義的世界観を植えつけることにあった。それを実現するためには、まず当時の英国人が持っていた偏狂な絶対主義的な価値判断を打破することである、と彼は考えた。場所、風俗、習慣の差によって価値は変る。英国で絶対的価値があると信じ込まれているものも、中国では茶番劇の材料にもならない薄い価値しか持たないものであるかも知れない。価値とはそのように相対的なものである。Goldsmith はこのことを再三再四、作中の彼の代弁者 Lien Chi Altangi を通して語っている。彼が作品中に中国を取り入れたのも世界には異なる価値の存在することを示すことにあった。したがって彼の風刺はひとつひとつ別な事柄を対象として取り上げているが、実はその根底に、絶対的価値規準にしばられた狭まじ独善的な考え方に立つ英国社会を排し、もっと広い考え方に立つ英国社会を建設しようとする意図が秘められていたといつてよからう。また、このことは寛容の精神に容易に結びつく。異なった風俗習慣は、その国に住む国民が彼らの土地、風土にもっとも忠実に生きた歴史的所産であるから、異質なものであるという理由だけでこれをしりぞけることはできない。常に相手の立場を認める寛容な態度の必要性を彼は作中折にふれ示唆している。世界の向上、人類の発展はこのような態度から生れるものであり、それは、とりも直さず、英国人が *The Citizen of the World* になる大きな前提であると彼はこの作で指摘している。

The Citizen of the World をこのような観点でとらえると、中国はその作品構成上の単なる手段に過ぎない。極言すれば、Goldsmith にとって作品の素材は別に中国に限らずどの国の事柄でもよかつたのである。にもかかわらず、彼が敢えて中国を素材として選んだのは、彼の鋭いジャーナリスティックな感覚によるものといえよう。それは、その頃 *Spectator* 誌や *Tatler* 誌で人気があつたいわゆる啓蒙的読物——すなわち知識と道徳を一致させた読物——に類する作品が、古来、中国に伝わる説話や教訓譚の中に多くあるのを知った彼は、これらを利用することによって Hatchett や Murphy などによる元曲「趙氏孤兒」の改作以来高まりつつあつた一般の中国に対する

文学的関心に迎合しようと試みたのである。ただ、Goldsmith の場合は単に中国の説話や教訓譚を英国に伝えるだけでなく、前述したように、それをもって当時の英国社会や文壇が固守していた偏狭な絶対主義的な考え方を風刺しようとした点、大きな意義があるといえる。

〔Ⅲ〕

以上、フランスのイエズス会神父、とくに Le Comte と Du Halde 両師の著書が18世紀英文学に与えた影響を概観してきた。Hatchett や Murphy などの劇作家は中国古典劇の翻案により、当時の文壇における異国趣味を刺戟し、中国へその眼を開かず一方、Goldsmith は両師の著書に盛られた中国の資料を風刺に生かし、当時の独善的、閉鎖的英国社会に世界的視野を与えるべく努力した。中国はかくして、英国の文化的発展に貢献し、英国の中国に対する文化面での認識は漸次、日を追って上昇の気運をたどるのだが、18世紀末になって、この気運は急激に下降線をたどるようになる。その原因は世紀の中頃から極端な中国礼讃を骨子とする作品が目立って多くなり、それに対する反発が英国の一部の文化人の間で高まりはじめたからである。それが爆発点に達したのは、フランスの神父 Abbé Raynal の *Histoire philosophique et politique des établissements et du commerces des Euroéens dans les deux Indes* が1776年に英訳され紹介された時である。この本は中国の現状を極端に理想化して描き、ユートピア中国を「祖国の新思想団体に紹介し蹶起を促し、基督教と専制政治とを倒壊せんこと」¹²⁾ を目的として執筆されたものだけあって英国でのそれに対する反発は大きかった。この書にまず反対の狼煙をあげたのは、Samuel Johnson である。かつては Du Halde 師の「支那帝国全誌」を *Gentleman's Magazine* でとり上げ、好意ある書評まで書いた彼は、Abbé Raynal の人格とその著書の目的を知るに及んで、中国に対する彼の態度は急変した。James Boswell はこのことについて Johnson との会話を次のように書いている。Johnson が東洋人は野蛮人だときめつけた時のことである。Boswell: “You will except the Chinese, Sir?” Johnson: “No, Sir.” Boswell:

“Have they not arts?” Johnson: “They have pottery.”¹³⁾ Johnson と同じく Abbé Raynal の中国礼讃論および彼の思想に対して強い反発を表わしたのは、John Wesley であった。彼は Raynal を “one of the bitterest enemies of Christianity” と評し、彼の本は「夢物語」であり「キリスト教の基礎をくつがえすもの」¹⁴⁾ と述べている。

中国は、以上のように、世紀末を迎えるにしたがって英国の文人の前から姿を消していきが、それに反比例して一般人の美術面での中国に対する関心と興味は日を追ってますます深まっていく。そして、その興味は chinoiserie という流行を生み、それが Sir William Chambers の中国式庭園に、あるいは Thomas Chippendale の家具のデザインに生かされることとなる。18世紀は、このように、知的面での中国文化の受容から美術面での中国文化の受容へと移る英国文化史上、興味ある一時期であるといえよう。

(註)

- 1) 拙稿「英国における中国の映像」社会学部紀要第9・10合併号
- 2) ブーヴェ「康熙帝伝」54頁
- 3) 「イエズス会士中国書簡集」康熙編147頁
- 4) Joseph Addison & Richard Steele: *The Spectator* vol. II p. 63
- 5) *Collected Works of Oliver Goldsmith*, vol. II, p. 39 & p. 476 footnotnotes
- 6) Allen: *Tides in English Taste* vol. I, p. 182
- 7) *Johnson's England*, vol I, p. 95
- 8) *Collected Works of Oliver Goldsmith*, vol. II, p. 332
- 9) *ibid*, p. 305
- 10) *ibid*, p. 77 footnote
- 11) *ibid*, p. 426
- 12) 後藤末雄「中国思想のフランス西漸」(2) p. 176
- 13) *Boswell's Life of Johnson*, p. 984
- 14) *The Journal of the Rev. Wesley*, VI, p. 186

参 考 書 目

1. Addison, Joseph, and Others. *The Spectator*. ed. G. Gregory Smith. 4 vols. Eveyman's Library. London : Dent, 1951.
 2. Allen, B. Sprague. *Tides in English Taste* (1619—1800). 2 vols. New York : Pageant Books Inc., 1958.
 3. Blak, William. *Goldsmith*. London : Macmillan, 1918.
 4. Boswell, James. *Life of Johnson*. ed. R. W. Chapman. Oxford ; University Press, 1953.
 5. Conant, Martha Pike. *The Oriental Tale in England in the Eighteenth Century*. London : Frank Cass, 1966.
 6. Dobson, Austin. *Eighteenth Century Vignettes*. 3 vols. World Classics, Oxford : University Press, 1923.
 7. Goldsmith, Oliver. *Collected Works*. ed. Arthur Friedman. 5 vols. Oxford : University Press, 1966.
 8. Goldsmith, Oliver. *Collected Letters*. ed. K. C. Balderston. Cambridge : University Press, 1928.
 9. Quintana, Ricardo. *Oliver Goldsmith*. New York : Macmillan, 1967.
 10. Reichwein, Adolf. *China and Europe*. London : Routledge & Kegan Paul, 1968.
 11. Sherwin, Oscar. *The Life and Times of Oliver Goldsmith*. New York : Collier Books, 1962.
 12. Turberville, A. S. ed. *Johnson's England*. 2 vols. Oxford : Clarendon Press, 1952.
 13. Wesley, John. *The Journal of the Rev. John Wesley*. ed. Nehemiah Curnock. London : Charles H. Kelly, [n. d.]
- ◇
14. ブーヴェ著後藤末雄訳 矢沢利彦校註「康熙帝伝」東洋文庫, 平凡社 昭和45年
 15. 後藤末雄著 矢沢利彦校訂「中国思想のフランス西漸」東洋文庫 全2巻 平凡社 昭和44年
 16. 岩村忍著「東洋史の散歩」新潮選書, 新潮社 昭和46年
 17. 金子建二著「東洋文化西漸史」富山房 昭和18年
 18. 司馬遷著 野口定男訳「史記(中)」中国古典文学大系, 平凡社 昭和44年
 19. 矢沢利彦訳「イエズス会士中国書簡集(Ⅰ)」康熙篇 東洋文庫, 平凡社 昭和45年